

[080] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10185>

出版情報：語文研究. 80, 1995-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



《會員著書紹介》

雅俗の会編

『西国大名の文事』

本書は、西日本新聞に平成四年一月から同年十二月にかけて連載されたものに増補を加え、新たに巻末に「西国大名の文事年表」を附し一書としたものである。

取り上げられた大名は四十余名。その文事は詩歌・書画は勿論の事、算学・博物学などの自然科学も含め、多岐に渡っている。江戸時代凡そ三百年間、しかも第一級の文化が常にその身边にあったであろう大名を題材にしているのだから当然の結果と言えばそれまでであるが、改めてその豊穡さに瞠目させられる。

大名の文事を取り扱った書の先蹤としては福井久蔵氏の『諸大名の学術と文芸の研究』（昭和十二年、厚生閣）の名著がある。本書は、「西国」と地域を限定していることもあり、規模的にはこれよりずっと小さいものであるが、そのアプローチの仕方によって先蹤とは一線を画したものとなっている。

『諸大名の学術と文芸の研究』では、和歌や漢詩文といったそれぞれのジャンルによって章を分け、各々のジャンルでどのような大名がどのような活動を行なったかを述べていくという形を採った。それに対して本書は、一人一人の大名に焦点を合わせ、その大名の特定の文事を話題の中心に据えながらも、そこに関わってくる人々や、その当時の藩の状況などをからめて述べることによって、大名を中心とした文化圏の一端を浮かび上がらせている。

中野三敏氏は本書の「はじめに」の項で、江戸時代の文化について「参勤交代というシステムは、各大名を軸として中央の文化と地方の文化を上手に混ぜ合わせ、江戸という巨大な文化都市を作る一方で、各藩毎の地方文化を、少なくともその上澄みの部分に於いては極めてハイ・レベルで均質なものとする事に成功した。」と述べてある。こうした高いレベルでの均質性と、それと同時に存する各藩の独自性をと本書は確実に捉えており、それはやはり現在身近に残されている西国大名達の文化的遺産を丹念に追いかけた、言わば地の利を生かした結果と言えよう。この点において、本書は文化的にも、又地方的にも高い価値を有するものとなるはずである。

（平成七年三月 葦書房 B6判 二八四頁 三、〇九〇円）

奥村三雄著

『日本語アクセント史研究』

本書は著者の文献国語史的立場からのアクセント史研究（第二編第五章第二節「法相宗系寺院における般若心経のナラ読み」をのぞく）をまとめたものである。構成は以下のとおり

第一編 上代語のアクセント

第一章 上代語アクセントの研究

第二章 日本書紀音仮名の原音声調

第三章 日本書紀音仮名一覧

第四章 アクセント資料として見た日本書紀音仮名

第五章 上代語アクセント管見

第六章 上代語アクセント各論

第二編 中古期以降のアクセント

第一章 中古期以降中央語のアクセント変遷

第二章 上昇調拍●の衰退

第三章 下降調拍(表記)の衰退

第四章 和語の入声点

第五章 日本的異音の声調

分量的には第一編が全体の三分の二をしめ、本書の中心をなす。この〈音仮名の原音声調と中古期以降の日本語アクセント資料との対比による考察〉のもととなった資料は、第三章・第六章に詳細に提示してあり、著者の考えの根拠を知るうえで有益である。また、考察方法の具体面について著者のとった立場は第二章・第四章で述べられており、その過程でたとえば、広韻での複声調字のあつかいや、アクセント反映度における α 群 β 群の評価などについての先行研究に対する異論も随所に見られる。将来的には日本書紀以外の文献の音仮名の研究も手がけるとのことである。

第二編は標記のテーマでの各論。著者の言う「調素の変遷」にかかわるものを中心とする。『講座国語史第2巻』140-150頁の記述を、より綿密にしたものと言えよう。やはり用例の一覧が、第二章から第四章の各章末にまとめて掲げてある。第五章は、第一編第二章第三節「いわゆる漢音異音の声調」や第二編第二章と関連するものがあり、また、この方面の開拓者である著者の前々からの説を補強するものとなっている。第二節の「ナラ読み」の他に、第四節「原音声調について」の李朝期の朝鮮漢字音資料など、著者が言及することの少なかつた資料が取り上げられる。

「はしがき」「あとがき」によれば、第三編として「近代語のアクセント」が予定されていたが、それは第一編・第二編で割愛した部分もふくめて続編にゆずるとのこと。一日も早い続編の完成を願うものである。

(一九九五年四月 風間書房 A5判 六〇六頁 二四七二〇)

今西祐一郎・福田智子・菊地仁編

百人一首注釈書叢刊14

『百人一首診解 百人一首師説秘伝』

九州大学文学部蔵『百人一首診解』は、それまで現存が確認できなかった、頓阿の百人一首注を含む書として、昭和三十七年十月、島津忠夫氏によって、初めてその存在が紹介された。以来、研究者の関心を集めながらも、その内容は公開されぬままであったが、このほど、百人一首注釈書叢刊の一冊として刊行された。本書は、一五頁に亘る詳細な解題とともに、『診解』本文の翻字(二四二頁)を収めたものである。

解題によれば、『百人一首診解』という書名は、題簽にのみ付されたもので、実は、『小倉幽玄抄』なる書であるらしい。序文には、親阿なる者が、宝暦六(一七五六)年閏十一月に、武蔵国葛飾郡照應山學圓寺で、この書をなしたと記す。注釈部分の構成は、各首はじめに頓阿の注と称する解釈を置き、それから、江戸中期の儒者坂静山(光淳)、錦織先生の注釈(小倉楓)を引用した後、親阿自らの説を付加するという体裁をとる。坂静山には、本書所収の市立米沢

図書館興譲館文庫蔵『百人一首師説秘伝』（菊地仁氏編）という、彼の講釈の聞書が存するが、その内容は、『諺解』所載の静山の説とは必ずしも一致しないという。他方、錦織先生の「小倉楓」は、井上秋扇著『百人一首基箭抄』に、その内容が極めて近い例が見出せ、また、『諺解』が、北村季吟『百人一首拾穂抄』から「御抄（幽斎抄）」を引用するといった影響関係が指摘されている。

このように、本書は純粹な頓阿注ではないが、親阿という、今日はその経歴すら未詳と言わざるを得ない当時の一知識人が、頓阿注をはじめとする種々の注を列挙しつつ、自説を述べているところがおもしろい。それはまさに、「近世中期の百人一首享受の具体的な姿」であるといえよう。

（一九九五年一〇月 和泉書院 A5判 二二五頁 八二四〇円）